

**連載****欧洲から（1）電子音響音樂を支えるラジオ放送**

*Hiromi J. Ishii*  
City University UK, Dept. of Music

**概要**

この連載記事は主に欧洲における現在の電子音響音樂に関する様々な活動や問題を電子音響音樂と一般社会、電子音響音樂と教育、電子音響音樂と現代音樂界などの観点からレポートしていく。第一回目の記事ではドイツの電子音響音樂とラジオ放送について述べていく。

This article-series reports today's issues and activities associated to electroacoustic music in Europe from the viewpoints of "electroacoustic music and general society" "electroacoustic music and education" and "electroacoustic music and contemporary music society".

**1. 導入**

音楽とラジオ放送の関係は密接であり長い。音質など技術的な問題、著作権などの問題もあるが、音楽活動の広報という役割を担う事で音楽家と一般社会のリスナーの間を取り持ってきた。電子音楽との関係においては、ラジオはさらに積極的な役割を負ってきた。電子音楽はケルンにある北西ドイツ放送<sup>1</sup>局内で誕生し、二十世紀中盤、ここを始めミラノのイタリア放送協会電子音楽スタジオ、NHK 電子音楽スタジオなど世界各国の放送局に開設された電子音楽スタジオで多くの作曲家達がエンジニアの協力を得ながら作曲をした。西ドイツ放送のスタジオはシュトックハウゼンの活動を支える拠点でもあったことは、現代音楽史上よく知られている。

**2. ドイツにおける電子音樂スタジオ<sup>2</sup> の現在**

ドイツにおける電子音樂スタジオは、その後ケルン、エッセンを始め次々とムジークホッホシューレ<sup>3</sup>（以下音楽大学と訳す）などの教育機関に設立されるようになった。現在では相当数の音楽大学が何らかの形で電子

音樂スタジオを持っている。フォルクヴァンクホッホシューレ・エッセン（以下エッセン芸術大学と訳す）には主専攻科目としてコースが置かれ、またドレスデン音楽大学のように作曲専攻学生に対し電子音響音樂作曲をも必修としているところもあるが、通常作曲及び器楽専攻学生の副科選択科目としてコースが存在する。教育レベルではそれぞれのスタジオが特徴を出しつつ活動を開催し、加えてベルリン工科大学スタジオやケルン大学音楽学部に代表される大学系スタジオが工学系研究や音楽学研究とリンクしてゲスト作曲家を招いたりコンサートを主催したりしており、これらのほか専門機関としてカールスルーエの ZKM が存在する。

一方西ドイツ放送の電子音樂スタジオは、1990 年代初めに歴史を閉じた NHK の電子音樂スタジオと同様、現在では事実上活動していない。しかしライブルグの南西ドイツ放送実験スタジオはアクティヴで、ZKM とともに Giga Herz コンクールを主催している。

**3. ドイツの電子音響音樂放送事情****3.1. WDR の場合**

電子音響音樂を含む藝術音樂を放送しているのは西ドイツ放送では WDR3 である。このチャンネルでは商業音樂、軽音樂は流さない。ドイツでは E ムジーク、U ムジーク<sup>4</sup> という分類があり、著作権登録上ジャンルがはっきり分かれているので、どれが藝術音樂でどれが商業音樂であるかなどという議論にはならない。この点は、商業音樂が藝術音樂であるかのように錯覚されているケースも目につく日本の音樂社会とは全く異なっている。

WDR3 の現行の放送予定を見ると、現代音樂の放送プログラムは次のようになっている。基本的には毎週四回、日月水金曜日の夜に放送が組まれ、それぞれの詳細は、日曜 23 時 5 分から 24 時 Studio Neue Musik(現代音樂)、水曜夜 23 時 5 分から 24 時まで Studio Elektronische Musik(電子音響音樂)<sup>5</sup>、毎週金曜夜 23 時 5 分から 24

<sup>1</sup> 1955 年以降西ドイツ放送。

<sup>2</sup> ELEKTRONISCHES STUDIO は固有名詞として定着しているのでそのまま訳する。

<sup>3</sup> Musik Hochschule. 音楽大学に相当するドイツの音樂専門教育機関。ドイツでは 6,3,3,4 年制の教育制度ではないが、ここで「音樂大学」と訳する。

<sup>4</sup> Ernstmusik 藝術音樂。Unterhaltungsmusik 軽音樂、娯樂音樂。

<sup>5</sup> ここでは現在の電子音響音樂も含めて指している。

時まで Studio Akustische Kunst (音響芸術)、土曜夜 23 時 5 分から 24 時 Frei Raum (インプロヴィゼーションなど) があり毎週最低でも約 4 時間を現代音楽作品の紹介に当てている。また春秋など現代音楽祭が多いシーズンでは、Konzert として 2 時間枠で番組が組まれたりコンサートのライブ放送が入る場合もあり、それによって上記の放送日が変更になったりもする。Studio Neue Musik では比較的“古い”現代音楽作品が放送され、Konzert では現在進行形で活躍する作曲家達や現代音楽演奏家達の最近のコンサートに焦点が当てられている。

akustische Kunst はラジオ放送とともに発達したドイツ特有の作品形態といえるだろう。一般にはラジオフォニーという分野である。音楽作品とは異なり大量のテキストを含んでいたり、ストーリーがあるような所要時間の長い音響作品を指す。一曲あたり 45 分、1 時間という長大な作品は、ラジオ局にとっては番組を組みやすく好都合であるので、ラジオフォニーはラジオ放送に密着して発展してきたのである。

放送作品数という点でみると 2009 年 5 月から 8 月までに、電子音響音楽 36、音響芸術作品 11 の計 47 作品が放送されることになる。さらに、この他 Konzert の枠でも電子音響音楽作品があり、Frei Raum でコンピュータが絡んだインプロヴィゼーションもあるのでこの数は「最低でも」ということで、実際には 50 程度になる。また現代音楽全体の作品放送数に関しては、Studio Neue Musik 枠や Konzertなどを加えれば、総放送作品数はこれの倍以上になる。

### 3.2. 南西ドイツ放送 SWR の場合

ドイツは合州制をとる国なので、全国放送である総合放送以外の文化放送は他の地域へ行くと受信出来ず、別の放送局傘下になる。南ドイツならバイエルン・クラシックが WDR3 に当たるし、中部ドイツなら MDR フィガロになる。それぞれのラジオ局が先進的な WDR ほど電子音響音楽を放送しているわけではないので、以上のような恵まれた受信環境が全国中あるというわけではない。南ドイツのバイエルン・クラシックではもっと保守的にクラシック音楽が大きな割合を占めているし、中部ドイツ放送 MDR フィガロのように音楽ならジャズもロックも現代音楽も混ぜこぜにプログラムしている放送もある。ここでもうひとつ ZKM があるバーデン・ヴュルテンベルク州の南西ドイツ放送をもうひとつ例にあげておこう。現代音楽は SWR2 から放送されているが、電子音響音楽という枠は特に置かれていない。しかし月曜 23 時 3 分から 24 時と水曜 23 時 3 分から 24 時の週 2 回に電子音響音楽も含んだ現代音楽の放送が組まれている。このほか、第一火曜日の 23 時 3 分から 24

時には ars acustica という枠があり音響作品を幅広く取り上げている。電子音楽の歴史を担う WDR ほどではないが、SWR の場合はドナウエッシングン音楽祭などの背景があり、現代音楽全体としては最低週 2 時間 15 分平均を持っていることになる<sup>6</sup>。

一方、その他一般の音楽番組の中にはオリヴィエ・メシアンやアルヴォ・ペルト、フィリップ・グラス、ヴォルフガンク・リームなどの名も見られ、黛敏郎の涅槃交響曲をいまだに現代音楽番組枠で放送する日本とは大分姿勢が異なっているのがわかる。NHKFM が電子音響音楽を含む現代音楽全体が週 1 回わずか 1 時間弱の放送時間しか持たず、その最低限もオペラなど他のクラシック音楽放送につぶされることがあり、同じ放送チャネルで J-ポップなどの商業音楽と放送枠を争わなくてはならない。電子音響音楽作品が全く放送されない週は稀ではない。何が問題の根本であるのか考える必要があるだろう。

### 3.3. ドイツ電子音響音楽協会独自の放送

ドイツ電子音響音楽協会 DEGEM では現在インターネットを使ったウェブ・ラジオによって独自に電子音響音楽作品の放送を行っている。この「放送局」は ZKM に置かれていて、24 時間休み無しで通常 A から E までの 2 時間単位のプログラムブロックが組まれ、ブロックは曜日ごとに時間帯を変えて放送される。それぞれのブロック内のプログラムは週単位で更新される。各ブロックはテーマティックに様々にフォーカスされていて番組全体の多様さを作り上げている。放送作品数の点では、例えば 5 月 25 日の週だけで 25 作品と 1 インスタレーションが放送されるから、ひと月平均で約 100 に及ぶ電子音響音楽作品を聴くという機会が提供されていることになる<sup>7</sup>。

一般的のラジオ放送同様ステレオ放送なので、多チャンネル作品の持つオリジナルの音響空間は再現できないが、ステレオ版は作曲家自身によるものであり、受信者側が高品質のスピーカーさえ持つていれば様々な電子音響音楽作品をかなりよい条件で聴くことができる。

これらのラジオ放送がドイツ全体の電子音響音楽の活性を支えているのは言うまでもない。

## 4. 電子音響音楽を聴く耳を持つディレクター

ドイツのみならず、電子音響音楽祭を訪れる時々ラジオ放送のディレクターに出会う。彼らは主だった音

<sup>6</sup> 相当数の現代音楽作曲家が電子（音響）音楽を学んだ経験を持つというドイツでの背景は、日本には無いものである。

<sup>7</sup> <http://www.degем.de/webradio> または、  
<http://biblio.zkm.de/DegemWebradio/> 参照

楽祭に足を運んでは実際に自分の耳で様々な入選作品を聴き、判断し、自分の番組を組む材料とするのである。「あなたの作品を聴いた。自分の番組で放送したいがどうか」などと声を掛けてくることもある。言葉を変えれば、電子音響音楽を聴き、自分で判断するだけの耳を持っている人物がラジオ局のディレクターをやっている、ということである。私と夫のキューレートで今年1月にエッセン芸術大学で行ったヴィジュアルミュージックコンサートなども、事前に地元のテレビ放送局が聞きつけて、リハーサルを取材したいと申し込んできた。放送番組を作成するには材料が必要である。だからディレクター達は常にアンテナを張り巡らせて何が世の中で起こっているかを聞き逃さないよう注意しているのだ。またラジオ局員でない音楽学者や評論家などが放送番組の企画を持ち込むケースも多い。企画が面白ければ当然取り上げられる。繰り返すが、「放送局は放送する材料が必要」なのだ。日本にいた15年以上前に、知り合いの博報堂のディレクターに勧まされてラジオ局に企画を売り込もうとしたことがあるのだが、最初から「企画売り込みお断り」と門前払いを掲げている放送局がほとんどだったことを思い出す。日本の場合、放送局は企画専門の関連会社と提携し、これらが番組企画を請け負う。しかし毎日狭い放送業界やメディア業界で働いている人々に、現代音楽界で起こっているもっとも新しい芸術の波に目を向け耳を傾ける余裕があるのだろうか。またそういった新しい音楽を判断することができる音楽的素養を持っている人々がどれほどいるだろうか。

## 5. 聽く耳のある社会を育てる

新しい芸術音楽に対して聴く姿勢のある社会と聴く耳のない懐疑的な姿勢の社会とでは、作曲活動にかかるストレスが違う。新しい音楽を聴く耳は、一朝一夕にできるものではない。特に電子音響音楽のようなデリケートな響きの表現による音楽では、聴衆の側からアプローチする姿勢が必要であり、繊細な表現を聞き分け、聴き取る耳を育てていく必要がある。いつも GRM のオリヴィエ・メシアンホールや ZKM の Kubus のような最高条件のスピーカやホール音響で電子音響音楽を聴くことは望めないにしても、ある程度満足のいく装置で数多く繰り返し聴く、といった音経験が必要になる。そういう意味で、WDR の豊富な電子音響音楽放送は一般リスナーの意識の啓発という役割を担い、底辺の拡大効果を持っているし、一方 DEGEM のウェブ・ラジオは、ほぼオリジナルに近いクオリティの高い音質で大量の電子音響音楽作品を聴くことが出来る機会を提供しており、一般リスナーはもとより作曲家達への貴重な情報提供と、特に若い世代の作曲家達にとって耳を養うための強力なサポートになっている。

## 6. 参考文献

- [1] *Neue Musik, Neue Klänge: im Radio und auf der Bühne*, WDR3. Köln, Germany, Mai-August 2009.
- [2] <http://www.swr.de>
- [3] <http://www.degем.de/webradio>

## 7. 著者プロフィール

### 石井紘美 (ヒロミ・イエンチ・イシイ)

博士 PhD (電子音響音楽作曲／音響美学)。DegeM、英国 SAN 会員。東京出身。武蔵野音楽大学研究員を経て音響技術専門学校、尚美大学講師ののち、98年よりドレスデン音楽大学上級課程にてヴィルフリート・イエンチ Wilfried Jentzsch に電子音響音楽を師事。Konzert Examen (演奏家資格試験) 合格後、2001年より ORS 英国大学長副学長協会奨学金を得て、英国シティ大学にてサイモン・エマーソン Simon Emmerson、デニス・スマーリー Denis Smalley の指導のもと『日本伝統音楽との関係における電子音響音楽作曲』のテーマで博士研究。CYNETart、フロリダ電子音響音楽祭、英国 SAN EXPO966、ベルギー Musiques & Recherches、北京 CEMC 他様々な音楽祭より招待や委嘱を受け、また作品が選出され、西ドイツ放送、中部ドイツ放送、ベルリン放送、またベルギー、ポーランドなどでも作品が紹介されている。2006年 ZKM ゲスト・コンポーザー。現在ケルン郊外に在住、Visual Music (Visualisation を伴う電子音響音楽) のキューレーターとして活動、これまでに CYNETart、ZKM、ベルリン工科大学、エッセン芸術大学、ドレスデン芸術協会にてプレゼンテーションを成功させている。2009年 ISCM のサポートによりヴェネズエラ公演、またポルトガル Musica Viva 祭でもプレゼンテーションが予定されている。

### Discography:

Portrait CD "Wind Way" WERGO ARTS 8112 2, Schott Music & Media. "Dreaming Stones" on DEGEM CD05 Imaginäre Landschaften, Cybele 960 205.